慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	特集 : グローバライゼーションと持続可能なメディアのデザイン : 意識とモビリティーズ2
Sub Title	Special issue : globalization, sustainability and media design : consciousness and mobilities 2
Author	小川 (西秋), 葉子(Yoko Ogawa Nishiaki)
Publisher	慶應義塾大学メディア・ コミュニケーション研究所
Publication year	2024
Jtitle	メディア・ コミュニケーション : 慶応義塾大学メディア・ コミュニケーション研究所紀要 (Keio media and communications research : annals of the Institute for Journalism, Media & Communication Studies). No.74 (2024. 3) ,p.1- 7
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集 : グローバライゼーションと持続可能なメディアのデザイン : 意識とモビリティーズ2
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA1121824X-20240300-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

特集：グローバライゼーションと持続可能なメディアのデザイン
—意識とモビリティーズ２

慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所
専任講師　小川（西秋）葉子

本研究プロジェクトの目的は，メディア・コミュニケーション研究において国境をこえて展開するモビリティーズ概念（小川［西秋］2023a）の理論的有効性とそのアプローチの持つ多様性と可能性を探り，社会学・心理学・地理学・生命学などと接続をはかることにある。

本プロジェクト研究代表者は，これまでに共編著（小川［西秋］・川崎・佐野 2010）ほかにおける時間の考察をもとに，2010 年度日本社会学会第 83 回大会シンポジウム「社会学と時間」において「グローバルな秩序形成における集合的生命の時間」というテーマで発表をおこなった（小川［西秋］2010b）。過去に取り組んだ関連プロジェクトでは，リサーチ・デザインを主眼におき，生命における可塑性であるダイナミック・インスタビリティという概念を多様な生命のかたちと機能において考察した。その成果は，小川［西秋］・太田編（2016）として出版された。前回の関連プロジェクトでは，そのような知見をさらに具体的なメディア分析に応用し，研究・教育両面において貢献するために小川［西秋］・是永・太田編（2020）を上梓した。

本特集では，そのような意識とモビリティーズを時間といった概念に集約させ，主として社会学の文脈において論じる方向を打ち出す。その中核となるのは，プラグマティズムの時間と時計時間という 2 種類の把握である。

第一に，時間をめぐるプラグマティズムの系譜は以下のように位置づけられる。その水脈は，心理学や生理学からプラグマティズムをへて，社会学にも多大な貢献をおよぼしたアメリカ合衆国の研究者ウィリアム・ジェイムズから，直弟子でシカゴ学派の都市社会学を牽引したロバート・エズラ・パークをへて，近年新邦訳が出版されたアーヴィング・ゴフマンにいたる。端的に表現すれば，ジェイムズは時間をループとしてとらえているといえる。その把握は，脳神経伝達にみられる迂回路（loop），リープとほぼ同義の跳躍（loup），そしてフランス語で仮面を意味するルー（loup）という 3 側面からなる（小川［西秋］2021b, 2023b）。

アメリカ都市社会学の創始者とされるパークは，このうちまず迂回路に着目し，共同研究者のアーネスト・ワトソン・バージェスの助けをえて，まさに「ループ」という名の架

空の都市の分析によって時間を空間化する書籍を編纂した。加えて，ゴフマンは「マナー」や「キー」と称される自己呈示の転調がなされるタイミングが社会分析において重要であることをしめした。ここでは，上にあげたループの3側面すべてが反映されているといえる。ゴフマンによる『日常生活における自己呈示』（Goffman 1959）は，そのような傾向を顕著に示す。ゴフマン自身はカナダ出身で，スコットランドのシェットランド諸島のエスノグラフィを執筆し，のちに20世紀アメリカ社会学を牽引した。同書には時間というテーマを異なるアプローチでとらえたプラグマティズムの系譜が見てとれる（小川［西秋］2021b, 2023b）。

これまでゴフマンは，チャールズ・ホートン・クーリーやジョージ・ハーバート・ミードといったプラグマティズムからシンボリック相互作用論へと発展した潮流においてとらえられていた。それに対し，ウィリアム・ジェイムズややはり彼の薫陶をうけたパークに連なる新たな水脈を提示し，近代あるいは前近代の時間の検討と批判を同時におこなう可能性がみとめられる（小川［西秋］2023b）。じつは，初期のジェイムズによる時間の知覚についての議論は，ミードと同様に「実在は，常に現在のなかにある」（Urry 2000=2015:204）というものである。しかし，その後のジェイムズの足どりから時間をめぐるメディア・コミュニケーションにつながる上記の3側面を指摘することができると考える。

さらにゴフマンが前掲書で引用しているジョージ・サンタヤナの発言は，3つ目の仮面，ひいては配役として，つかの間演じられるペルソナという概念を下支えする。巻頭，あるいは本文中で長々と引用され，中心的な役割をあたえられているサンタヤナは，チャールズ・サンダース・パースやジョン・デューイとともにプラグマティズムの創始者のひとりとされるジェイムズの教え子であり，のちに世論研究で知られるウォルター・リップマンの上司となった人物である。これまでジェイムズの思想は，哲学者のバートランド・ラッセルによっておとしめられ，リチャード・ローティによる解釈によってほとんど葬り去られていた。これに対して，筆者による上記のような考察は，近年の哲学や思想史におけるニュー・プラグマティズムの興隆とともにジェイムズを救済しようとする試みのひとつともいえる。

第二に重要となるのは，時計時間と称される時間意識とそれにともなうメディア・コミュニケーションである。これまで本プロジェクトで注目してきたモビリティーズ概念を提唱する過程で，イギリスの社会理論家ジョン・アーリは時間についても考察し，近代の特徴をなすクロックタイムについて10の諸論点を指摘する。

それらは，1）正確に計測され，均一かつ無数の小さな単位への時間の分解（小川［西秋］2007，2010a），2）有意味な社会的営為（実践，補足筆者）からの，そして，昼夜，四季，生から死への運動といった自然にみえる区分からの脱埋め込み（小川 1996a; Ogawa Nishiaki 1997a, 1997b, 2019; 小川［西秋］2010b, 2022），3）時間の流れを計測，表示するさまざまな手段の広範な利用（置時計，掛時計，懐中時計，時刻表，カレンダー，サイレン，スケジュール，タイムレコーダー，ベル，締切り，日誌，目覚まし時計など）（Ogawa Nishiaki 1996b, 1997a, 1997b, 2019; 小川［西秋］2020, 2021a），4）仕事，余暇活動の多く

の正確なタイムテーブル化（Ogawa Nishiaki 1997a, 1997b），5）節約，消費，活用（配置，補足筆者），蕩尽しうる独立した資源としての時間の広範な利用（小川 1996a），6）働き（活動，補足筆者）や意味としてではなく，管理される資源としての時間への志向（Ogawa Nishiaki 2018），7）数理的に正確で量的な尺度としての，つまり可逆的で方向をもたない時間への科学的変容（小川［西秋］2007, 2021b; Ogawa Nishiaki 2018），8）学童，旅行者，従業員，施設被収容者，行楽客等の同期化された時間的規律（Ogawa Nishiaki 2018, 2019），9）国中さらには世界中にわたる，生活尺度の同期化（小川［西秋］2007，2008, 2017; Ogawa Nishiaki 2018, 2020），10）時間を節約，組織化，記録（モニター，補足筆者），調整，割当てることの必要性をめぐる言説の普及（小川 1996b，小川［西秋］2010b, 2023b）といった諸観点である（Urry 2000=2015:201）。

本年度は『メディア・コミュニケーション』73 号に続き，「意識とモビリティーズ」という特集テーマをかかげて 2 年目となる。この機会に，上記のように提起された時間についての諸考察を意識とモビリティーズの交差する場として探究することを目指している。また，ウィリアム・ジェイムズの論ずる生命の可塑性の前段階としての論考をあつめる。いいかえれば，今回の特集は，上記の内容を，より幅広く，時間をめぐる社会学史や調査研究において再検討，ならびに発展させることを主な目的とする。具体的には，主に第二のこれまでの画一的なクロックタイム概念では十分にとらえることができない社会的な諸現象が起こりつつある点に着目する。このような目的のもと，「特集：グローバライゼーションと持続可能なメディアのデザイン―意識とモビリティーズ 2」と題した本特集では，昨年とはやや趣向をかえて，意欲的な理論的考察の分量をふやすとともに，AI とコロナ後のメディア・コミュニケーションをめぐる調査研究を加えた相補的な構成をとることとする。

前半の理論篇で，第 1 論文の梅村麦生「『時間の社会学』と社会学的時間批判：第 96 回日本社会学会テーマセッション報告を中心に」は，「非同時性の同時性」（梅村 2020）を論じたイタリア在外研究の経験をもつ社会理論家の著者が，現代社会学における「時間の社会学」の出現と，その問題意識をふまえて提案した第 96 回日本社会学会大会テーマセッション「『時間の社会学』と社会学的時間批判」（2023 年 11 月 8 日，9 日，立正大学）の 2 つの部会にみられる特徴と意義をふりかえる。本プロジェクトの研究代表者小川（西秋）葉子も「時間をめぐるプラグマティズムの系譜：ジェイムズ，パーク，ゴフマンを中心に」（小川［西秋］2023b）の報告をおこなった同セッションでの 2 発表をもとにした論考がそれに続く。第 2 論文の高橋顕也「社会は加速できない：社会学的システム理論と社会的加速論の両立可能性について」と第 3 論文の徳宮俊貴「現在志向の若者たち？：見田宗介におけるコンサマトリー概念の三側面から」は，社会の加速化を論じるドイツのフランクフルト学派のヘルトムート・ローザ，日本の社会意識をあざやかに描出し続けてきた見田宗介の理論を，ニクラス・ルーマンのシステム論や若者の消費行動にそれぞれそくして，批判，ならびに発展させる。学説史，比較理論研究，若者研究と，切り口が異なる時間研究がそろうことで，議論は百花繚乱の様相を示してゆく。いずれの論文もクロックタイムを超える社会学の可能性を感じさせる。

後半の調査篇の3論文は，最新の大量データをもとにした貴重な分析である。第4論文の橋元良明・大野志郎・堀川裕介・天野美穂子「生成AIの利用実態と期待，生成物認識，受け入れ条件」と第5論文の篠田詩織・橋元良明「ChatGPTの不適切利用の実態」は，2023年10月20日から同月23日にかけて日本全国の3,000人を対象とし高い有効回答数をえた調査をもとに，社会の各分野に影響を及ぼしつつある文章生成を可能にする人工知能について日本の現況と情報行動をあきらかにする。さらに，第6論文の大野志郎・橋元良明「感染防止・外出自粛行動とメディア利用との関連：新型コロナウイルス5類感染症変更前後のパネルデータ分析」は，本プロジェクトの先行研究『モビリティーズのまなざし』（小川［西秋］・是永・太田 2020）や『メディア・コミュニケーション』73号の「特集2：グローバライゼーションと持続可能なメディアのデザイン―意識とモビリティーズ」（小川［西秋］2023a）でも論じた世界規模の感染症拡大のその後を追ったものである。本論文では，2023年2月14日から同月16日にかけてオンラインアンケートによる日本全国6,000サンプル，2023年9月14日から同月19日にかけて3,473サンプルをもとに，コロナ第1波・第2波ともに有効回答を得た3,319サンプルを分析する。

本稿で指摘したプラグマティズムの時間概念に照らしてみると，生成AIについては，特にサービス・情報産業分野において，短時間で効率よく作業を進めるための「迂回路」としてのメディア利用が期待されているようである。コロナの感染防止・外出自粛をめぐる情報行動についても，日常の行動パターンを変えることによってリスクを回避するという点で，同様の「迂回路」探索がおこなわれている。上記の論文は，3本ともに，本年度のプロジェクトに連なる，かねてのテーマである「集合的生命」について，人と人工知能をめぐるインターフェイスと生活のデザイン，あるいは人と人とのウェルビーイングをめぐる情報行動の選択という，興味深い事例を提供する。

今回の特集における，以上のような知見は，モビリティーズ研究の始源として，19世紀アメリカの生理学と心理学の始祖ウィリアム・ジェイムズによる意識の可塑性を再発見するのに貢献するといえるだろう。たとえば，「ハルシネーション」というAIが提示する真実とはかけ離れたヴィジョンへの警戒は，ジェイムズの「錯覚」概念を思いおこさせる。加えて特筆すべきは，一昨年急逝し，日本でも再考察が進みつつある社会学者見田宗介の論考に，ウィリアム・ジェイムズの影響がみてとれる点である。本特集第3論文でも論じられた見田のいう「コンサマトリー」概念，すなわち，翻訳不可能であるがときに「現時充足的」と訳されるこの用語をめぐって，検討をおこなっておきたい。かいつまんでいうならば，見田は，「社会心理学」「社会意識」の考察と同時期に，ジェイムズの「意識の流れ」に関連する言及をおこない，その10年後に「コミューン論」を発展させるタイミングで，今度はジェイムズの心理学における「アソシエーション」の章に掲げられた図表を参照している可能性がみてとれる。

第一に，佐藤健二によれば，1963年の段階で見田はのちの「コンサマトリー」概念につながる記述をのこしているという（佐藤 2023:10）。筆者の印象では，『思想の科学』誌に発表した見田論文における「発露」「倍音」（見田 1963:46）という表現は，ジェイムズのいう「意識の流れ」を構成する2つのメタファを反映しているように思える。前者は，

手にした雪の結晶が「水滴（drop）」に相転移するように，後者は，心理的な「上音・倍音（overtone）」の振動のように，音声コミュニケーションが発話される最中や後に残響や反響をおよぼしてゆくような状況を示している（James 1890:244-258）。これらの観察は，見田が邦訳ではなく，ジェイムズの原文にあたっていた可能性を提示する。

第二に，佐藤が「マンダラ図」と評し，真木悠介名義で見田が作成した欲求解放の原理の図表（佐藤 2023:18-19）には，『心理学原理』（1890）『心理学要綱』（1892）という両単著に収録された「アソシーション」を論ずる章でジェイムズが図解した形状に似たパターンがみられる。筆者がそのように推測する最大の理由は，ジェイムズの原図には「m」,「n」の文字がアルファベットの順番とは入れ替わっている誤植があることを見田が発見しているかのように，自作の図の中心にみずからのイニシャルである「M」の文字を配しているためである。『心理学原理』における「自己の意識」の章では，やはり「me」を時間において存在する中核（nucleus）とする考察がなされている（James 1890:400）。ゆえに，この表象は見田がその 10 年前に参照した「思考の流れ」の章だけでなく，それに続く「自己の意識」の章，さらには「アソシエーション」の章まで読みすすみ，その内容を統合し，自説に応用していたことを示唆していると考えられる。

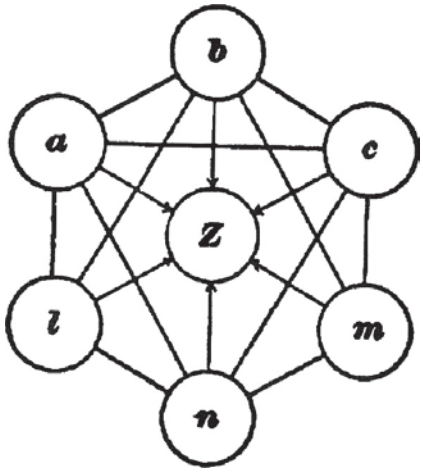

図１　ジェイムズのアソシエーション
（James 1890:586）

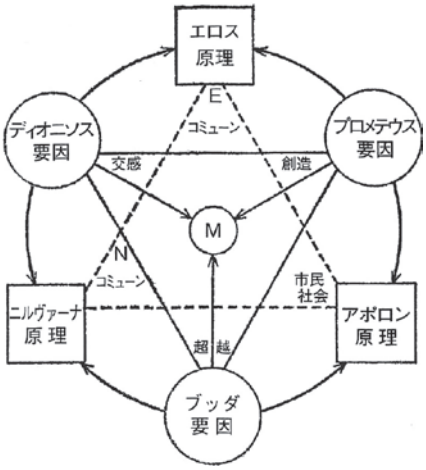

図２　真木の欲求解放の原理
（真木 1973:20［佐藤 2023:19 に引用］）

第三に，その後の見田の対応には，もう二段階の変化がみられる（見田 2017，2018）。なぜなら，「コンサマトリー」概念には，そもそもジェイムズの提唱したプラグマティズムの多大な発想源と目される 16 世紀の戯曲家ウィリアム・シェイクスピアの劇作技法がみてとれるためである。劇中では，不条理な状況で女性が男性を懲らしめるために「ベッドトリック」というストラテジーで対抗する。これは，英語で「コンサメーション（consummation）」，すなわち，結婚の約束を完了させるための床入りのことである。弱者が口約束を実効化するための「迂回路」として，性交渉をおこなうベッドに飛びこむ「跳躍」の際に，別人になりすますという「仮面」をかぶるふるまい（小川［西秋］2023b）が，シェイクスピアが多用した喜劇の結末につながる方略である。

見田自身は，体当たりの肉体的プラクティスによる欺瞞の打破という側面と，プラグマ

ティズムに通ずる頭脳戦略的な側面という，「コンサマトリー」という用語が内包する両義性にのちに気づき，修正をほどこしているようである（見田 2017:173, 217）。結局，2018 年の段階で見田はコミューンを「自由な個人が，自由に交響する集団として，あるいは関係のネットワーク」としての「自由な連合体 association」（見田 2018:154）と明記する。「コンサマトリー」にかんしては，イギリスのロマン派詩人ウィリアム・ワーズワスの詩「虹（私の心は躍る）（The Rainbow［My Heart Leaps Up］）」（1807）にそくして，虹を見ると「心が躍る」状態を，その実例とすることにおさまっている（見田 2018:155）。「あとがき」では，プラグマティズム研究で知られる故鶴見俊輔氏に本書が捧げられているとの文言がある（見田 2018:161）。最後の記述により，実は『思想の科学』誌寄稿以来，見田がウィリアム・ジェイムズを意識していた経緯がみてとれるようである。

以上のような考察は，比較社会学的な研究の道をもきりひらく。興味深いのは，見田が「コンサマトリー」概念を採用するときに参照したとされるアメリカの社会学者タルコット・パーソンズ（高谷 2012:519）が身をおいた教育・研究環境で，当時なお，ジェイムズの威光が残っていたことが推測できる点にある。すなわち，ジェイムズの後任となったヒューゴ・ミュンスターベルク同様パーソンズがまなんだドイツのハイデルベルク大学と，その後教鞭をとったアメリカのハーバード大学での状況が反映している。それだけではなく，このような「遂行」や「達成」といった経路移動のモビリティーズ（小川［西秋］2022）は，パーソンズに対抗心を燃やしたとされるハロルド・ガーフィンケルや，その後，アメリカ西海岸で開花したエスノメソドロジーにおいてもみられる無意識のインフラストラクチャとなっている。ここに，本稿でも触れたゴフマンをどのように位置づけるかは，これからの課題である。

近年，アニメーション研究や行動経済学でも注目されるジェイムズのアクチュアリティは，見田宗介のアフターライフ，すなわち，死後の再評価（奥村 2023）とも関連づけられるであろう。さらに，時間をめぐる知覚や行動の考察も，日本における新時代のメディア・コミュニケーション探究を豊穣にするための一助となることを期待したい。このような発想を可能にした実り多いテーマセッションを提案され，本特集の構成と査読にご協力いただいた梅村麦生先生に，この場をかりて，心より感謝する次第である。

●引用文献

Goffman, Erving, 1959, *The Presentation of The Self in Everyday Life*, Doubleday.（中河伸俊・小島奈名子訳，2023，『日常生活における自己呈示』，筑摩書房.）

James, William, 1892, *Psychology: Briefer Course*, Henry Holt and Company.

James, William, 1890, *The Principles of Psychology*, Vol.1, Henry Holt and Company.

真木悠介，1977=2003，『気流の鳴る音：交響するコミューン』，筑摩書房.

真木悠介，1973，「欲求と解放とコミューン」，『朝日ジャーナル』1973 年 1 月 5-12 日号，15(1):18-24.

見田宗介，2018，『現代社会はどこに向かうか：高原の見晴らしを切り開くこと』，岩波書店.

見田宗介，2017，『社会学入門：人間と社会の未来』，岩波書店.

見田宗介，1963，「死者との対話：日本文化の前提とその可能性」，『思想の科学』10:43-51.

小川（西秋）葉子，2023b，「時間をめぐるプラグマティズムの系譜：ジェイムズ，パーク，ゴフマンを中心に」，日本社会学会第 96 回大会テーマセッション「『時間の社会学』と社会学的時間批判」報告，立正大学，2023 年 10 月 8 日.

小川（西秋）葉子, 2023a,「特集 2：グローバライゼーションと持続可能なメディアのデザイン―意識とモビリティーズ」,『メディア・コミュニケーション』73:n. p..

小川（西秋）葉子，2022,「時間地理学と音楽コレオグラフィによるモビリティーズ映画探究：『アベンジャーズ / エンドゲーム』（2019）分析におけるエンタングルメント概念の効用」,『メディア・コミュニケーション』72:142-168.
小川（西秋）葉子，2021b,「集合的生命前史：グローバライゼーションを＜転調＞する」，一橋大学大学院社会学研究科博士論文.
小川（西秋）葉子，2021a,「メディア・ジャンルと知覚のモビリティーズ：ジャーナリズム映画批評の源泉」,『メディア・コミュニケーション』71:141-161.
小川（西秋）葉子，2020,「第四章　時間のエッジにおけるグローバル・テレポイエーシス：メディアのモビリティーズで問題化される都市」，小川（西秋）葉子・是永論・太田邦史編，『モビリティーズのまなざし：ジョン・アーリの思想と実践』，丸善出版，64-82.
Ogawa Nishiaki, Yoko, 2019, “Global Telepoiesis at Work: A Multi-Sited Ethnography of Media Mobilities”, *Keio Communication Review*, 41:15-36.
Ogawa Nishiaki, Yoko, 2018, “Global Telepoiesis on the Edges of Times: Cities That Matter in Media Mobilities”, *Keio Communication Review*, 40:49-59.
小川（西秋）葉子，2017,「モビリティ」，日本社会学会理論応用事典刊行委員会編『社会学理論応用事典』，丸善出版，542-543.
小川（西秋）葉子，2010b,「グローバルな秩序形成における集合的生命の時間」，日本社会学会第 83 回大会シンポジウム「社会学と時間」報告，名古屋大学，2010 年 11 月 7 日.
小川（西秋）葉子，2010a,「第一章　時間―空間と生命環境　サステナビリティとノンリニアリティ：グローバルな秩序形成における集合的生命の時間」，小川（西秋）葉子・川崎賢一・佐野真由子編『〈グローバル化〉の社会学：循環するメディアと生命』，恒星社厚生閣，25-51.
小川（西秋）葉子，2008,「第九章　日常生活としてのグローバル・コミュニケーション再考：グローバライゼーションと時間―空間の『リズム編成』における『第一基調』」，伊藤陽一・河野武司編『ニュース報道と市民の対外国意識』，慶應義塾大学出版会，209-233.
小川（西秋）葉子，2007,「グローバライゼーションと二重らせんの時間：ハイパー・リフレクシヴィティと集合的生命の解明のための批判的考察」,『社会学評論』57(4):763-783.
Ogawa Nishiaki, Yoko, 1997b, “Global Time/ Mobile Subject”, Paper Presented at Session 3: Fast Forward, Time and Value Conference, Institute for Cultural Research, Lancaster University, April, 1997, Lancaster, U. K..
Ogawa Nishiaki, Yoko, 1997a, “My Time is My Life: Globalization, Time-Space and Japanese Female Diaspora”,『明治学院大学社会学部附属研究所年報』27:31-40.
Ogawa Nishiaki, Yoko, 1996b,”Living on TOKYO Time”, Paper Presented at Session: Cultural Studies and Space, 2nd International Conference Cross-road in Cultural Studies, Network Cultural Studies, July, 1996, University of Tampere, Finland, Final Abstract Book, 114.
小川葉子，1996a,「グローバライゼーションと戦争のディスクール：海外在住日本人女性の言説における時間空間の再編成」,『一橋論叢』115(26):81-99.
小川（西秋）葉子・是永論・太田邦史編，2020,『モビリティーズのまなざし：ジョン・アーリの思想と実践』，丸善出版.
小川（西秋）葉子・太田邦史編，2016,『生命デザイン学入門』，岩波書店.
小川（西秋）葉子・川崎賢一・佐野麻由子編，2010,『〈グローバル化〉の社会学：循環するメディアと生命』，恒星社厚生閣.
奥村隆編，2023,『戦後日本の社会意識論：ある社会学的想像力の系譜』，有斐閣.
佐藤健二，2023,「見田宗介＝真木悠介の本願：人間解放の比較＝歴史社会学のために」,『思想』2023 年 8 月号，1192:7-23.
高谷幸，2012,「自己充足的 / 道具的」，見田宗介責任編集，大澤真幸・吉見俊哉・鷲田清一編『現代社会学事典』，弘文堂，519.
梅村麦生，2020,「非同時的なものの同時性：社会学における非同時性の問題について」,『社会学史研究』42:91-109.
Urry, John, 2000, *Sociology Beyond Societies: Mobilities for the Twenty-First Century*, Routledge.（吉原直樹監訳 , 2015,『社会を越える社会学＜改装版＞：移動・環境・シチズンシップ』，法政大学出版局.）
Urry, John, 2007, *Mobilities*, Polity.（吉原直樹・伊藤嘉高訳 , 2015,『モビリティーズ：移動の社会学』，作品社.）
Wordsworth, William, 1807, “The Rainbow（My Heart Leaps Up）”, *Poems, in Two Volumes*, Longman, Hurst, Rees, and Orme.